スキーと山

第三十號

札幌 スキーと山の會 發行

大正十二年七月廿七日第三種郵便物認可
大正十二年九月三十日印刷納本
大正十二年十月一日發行

急告

前號にて發表せる獨逸スキー映畫の公開は京濱地方災害の爲め延期する事となりました但しフイルムは無事でありますから御安心下さい。

定價

金參拾錢

＊前金御申込か、現金でなければお渡しいたしません。
＊御送金はなるべく振替にてお願致します。
＊六冊分前金拂込の方には送料を頂きません
＊前金の切れた時には最後の分の包裝にその旨記します。次の御送金あるまで配本を見合せます。
＊本誌は營利的の刊行物ではありません。紹介、緣故の有無にかゝはらず雜誌の代價は頂きます。

大正十二年九月三十日印刷
大正十二年十月一日發行
（毎月一回一日發行）
編輯者　赤松勳
印刷兼發行者　長谷川敦
札幌市北一條西二丁目
印刷所　札幌印刷株式會社
札幌市北六條西六丁目
發行所　山とスキーの會
振替口座小樽八四九五番

第三十號目次

記事

詩
オトブケより石狩岳へ　アントン・レンク（一）
ステアリングとボディスウイングに對する私見　藤江永次（二）
長途スキー旅行に就て　中野誠一（一六）
雪の名稱に就て　足羽正伸譯（二三）
會告　仙波正雄（二七）
寫眞
或る日の朝　藤江永次（五）
オトブケより見たる石狩岳　同　上（一一）

大正十二年十月發行

山は隈なく日を浴びて
恒なる雪は光り耀く
焦慮の生の惱みのかづかづ
洗ひ淨むる光の泉。

羚羊の通ふばかりなる
粗き岩間をつたひて歩む
高きを想ひ　高きを想ふ
一歩ごとの祈りの心。

――アントン・レンク――

オトプケより石狩岳へ

藤江永次

行程
帶廣——元小屋——オトプケ川（メトセップ—ポロカオトプケ——三俣——二十一ノ澤）——石狩岳——前石狩澤——
石狩川——大箱——層雲別——愛別

時日　大正一二年七月一四日——七月二七日
同行者　田口鎭雄　佐々木政吉
人夫　長田福松（金山より連れ來る）
原（元小屋より三俣まで同行）

薄暗いランプの下で音更川のせゝらぎを聞きながら熱い紅茶をすゝつてをる我々には、前人未踏の地へ足を踏み入れるといふ冒險的な氣持のため既に十分な緊張が漲つてゐた。再び山の男と成り得た喜ばしさ、未知の地に對する一種の懷疑的恐怖、そんな感情が交々襲ふてくるこゝを避けられなかつた。

實際音更川に對する豫備智識としては、我々を恐れしむるようなこゝの外何物も與へられなかつた。內地の登山家にも可成知られた音更なのである。私も北海道へ來たからには少くとも一度はゞ思つてゐたのである。さる登山家は音更川を

評して次の如く言つてをられる。「オトプケのみは全くハコと瀧との連續で到底その水源までこれを溯ることは出來ない。」又土地の人は「オトプケは熊捕りアイヌも入らない」といつてゐる。このことはオトプケの如何にも深奥なること、熊の甚だ多いことを裏書してをるのである。

これらのことは我々を恐怖と緊張とで包むにはもう十分なのである。流れの音は益々はつきり聞えてきた。部屋の隅に立てかけてあるピッケルは弱いランプの光を反射してをる。その下にはザイルやシュタイグアイゼンがこの行を待ちもうけてゐるかの如く並べられてある。三人のリュックははちきれそうになつてゐる。三人は暗いランプの下に膝を交へ地圖を擴げては各々の拙い經驗から色々のこゝを想像して見た。地圖といつても參謀本部のものはニペソツまでしか發行されてゐない。ニペソツの地圖までに出てゐる所だけでは所々崖は出てゐるが山も比較的開けてをり「ハコ」らしいこころは見受けられない。それに石狩岳の頂上から音更側を望まれたことのある慶應大學山岳部の一友人の話しでは「石狩岳のオトプケ側への傾斜は穗高の飛彈側位だ」といふことであつた。それ故オトプケに「ハコ」や瀧の連續してをる所があるとすればニペソツの地圖の北部に連る未發行圖にあると見ねばならないのである。然るにその部分に關してはあやふやな地形圖ゝ日本山岳會發行の二〇万分の地圖とがあるのみなのである。

それらの危しい地圖や土地の人々の話を參考に再び行程計畫をたて直した。出發前にたてたものよりは少し短縮して元小屋を起點に双雲別までとにかく總てに對し一三日分を準備した。二人の人夫と我々三人で之だけを分擔するのだがそれは可成りの重荷である。それ故罐詰類その他嗜好品と見るべきものは出來るだけ避けた。

金山から連れて來た人夫は福松といつた。立派な體の所有者で質朴な如何にもヤマゴらしい感じのする男である。彼はただ默々として我々の話を聞いてゐた。そして時々その重さうなきせるから出る煙の間々に自信ありげな微笑をもらしてゐた。もう一人の人夫は元小屋驛逓の主人が賴んでくれた、やはりこの土地のヤマゴで原と呼んだ。

元小屋は丁度オトプケの入口に當る。我々は昨日今日と長い平地を歩いてやうやくこの元小屋の驛逓に達した。それはずいぶん長い道だつたが決して我々を倦ましめなかつた。汽車をはなれて行くうちに水田から畑、畑から開墾地——林と道の兩側の景色が段々人氣を去つて行くのが何ともいひようなく嬉しかつた。大きな柏の原始林を切り開いて畑とし白い馬鈴薯の花の間に大きな黑燒の切株がごろごろしてをるなぎは屯田時代の景色が目に浮ぶようである。一つの教室がすべ

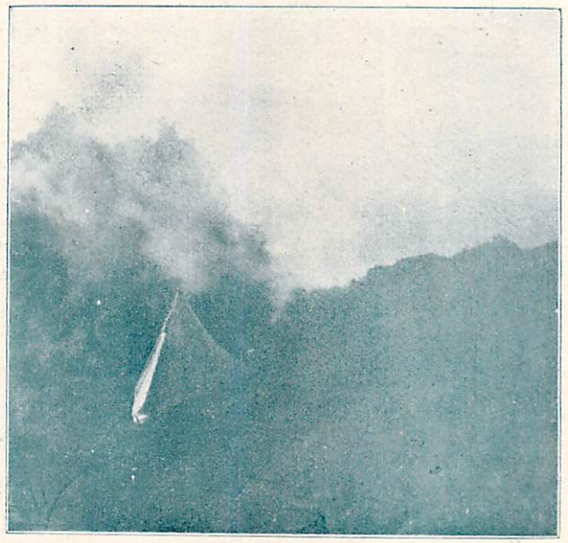
てであるような粗末な小學校、無心に草を食つてゐる放馬、行き交ふ毎に未知の我々にも挨拶をして通るその純朴な人々、そんなことはきらきらする都會からやつてきた自分には無上に有難かつた。

我々は元小屋驛遞の一夜を最後に暫らく對人關係を去り、與へられたる自然に於てすべてが許されるほんとうの自由な境遇になり得るのだ。人間には慾と智がある。その微力な慾と智をふるふ時自然は彼の感情を卒直に表す。自分は自然を征服するなんてそんな氣持ちにはなり得ない。ただ自然の美に浴し自然の幸福にしたり自然に歸へる氣持ちで明日の日の來るのを待つ。

七月一八日　曇　後　晴

昨夜おそくから降り出した雨も今朝は止んでゐたが、まだ一面に霧がたちこめてゐた。三俟まで同行する約束で頼んでもらつた人夫はまだ來ない。併し途中でユウンナィの長澤温泉へ立ち寄る必要があつたので温泉（タウシペツの合流點）ご待合ふことを約し、福松を殘して午前一一時一足先に出發した、その頃には霧もうすくなり太陽の光すら認められるようになつてゐた。ルックには確に六貫目程の荷物がつめこまれてあつた。肩にどつしりと來て歩み心地がいい。元小屋から上四里の間は造材所へ通ふ馬の歩き得る立派な道がオトブケの密林を縫ふたり、川に沿ふたり、或ひは崖の上へ出たり、こうした川に沿ふた道にはつきなみの景色を我々に見せた。併し潭をなしたり、巨大な一枚岩の崖をなしたり、ハコの形をなしたり、我々をして未知のオトブケのハコの物凄さを想像せしむるような材料も可成りあつた。一二時四〇分龍門の瀧に着いた。名こそ龍門の瀧だが瀧といふよりも寧ろ開門といひたい位の所である。土地の人の話によると、鱒はこの龍門の瀧まで昇つてくるがそれから上流にはゐないといふことである。成程晝食をとりながら見てゐると瀧壺にあたる箇所のすごくかき廻されてゐる白い水泡の中から、引切りなしに瀧をめがけて飛び上つてゐる鱒が見受けられた。網を張つて置けば一〇や二〇は直ぐ取れるといふことである。ここでさへこの調子なら上流のイワナが思ひやられると釣好きの田口君はにこにこしてゐた。

暫らくは左岸に沿ふたが段々川から離れ、全く水の音も聞えなくなつた。兩岸の山も次第に開け林越しに山々も見得られる程度になつた。瀧を去る一里程の所に、大きな立札にユウンナィ長澤温泉への別れ道が明示されてあつた。その道に



或る日の朝

—藤江永次—

沿ふて行くうちに以前にこのオトブケ森林の伐切に囚人に勞働せしめたその時に建てられた、十勝監獄の分監とでも稱すべき荒れきつた可成り大きい小屋が四つ五つあつた。間もなく再び川へ出た。その時はもう前のような岩石の影すら見られない大きな河原になつてゐた。川は丸太橋を二度渡ることによつてそれが大きい中の島になつてゐることを知つた。それは十分に地圖にのりうる程度のものであつた。それ故一時はその上流に當つて地圖に表はされてゐる中の島かと思つたがそれにしては餘りに距離の短かすぎるのを疑ひながら、道に從つて温泉へと急いだ。それも後で解つたのであるがあの中の島は去年の九月（大正一一年）の大洪水の時にできたのであるといふことだ。

中の島から丁度川筋に沿ふてニペソツが見えた。電光形に殘つた雪溪、彫つて取つたような急傾斜、鋸のような尾根、とても北海道では見られないようなその立派な山勢は我々を引きつけずには置かなかつた、そして是非足跡を止むべき山の一つに數へられた。その左の方には眞黑なウペペサンケがその雄大な姿を表はしてゐる。

午後三時半長澤温泉へ着いた。温泉はユウンベツに沿ひ僅に切り開かれた森林の中に建てられてあつた。虐たげられることを知らない犬や鷄が見なれぬ我々までも懷しさうに見てゐる。自分はまるでシベリアの森林を彷徨ふてゐるような氣持で案内を乞ふた。そして近藤直人氏（帶廣營林區分署長）からの紹介狀を差し出してオトブケについての智識を請ふた。一時間ばかり話した後長澤氏は、二三日前に一〇日ばかりの山籠りから出たばかりであるが、自分も是非オトブケを溯つて石狩岳へ行つて見たいと思つてゐたし、之はいい機會だからせめてその麓までででも同行しようと言ふことになつた。それで人夫達を待たしてあるこゝであるから明朝を約して四時半、辭してタウシペツの合流點へ向つた。熊笹を分ける度にプンブン飛び出る蚊の猛襲を拂ひ除けながらタウシペツへ來た時はもう日はウペペサンケの彼方にかくれてゐた。先へ來てゐた人夫等はもう大きな流木を集めて勢よく火を焚いてゐた、厚く敷きつめられた蕗の葉の上にテントが張られ、我々の夕食の膳を賑してくれるイワナやヤマベも既に料理された。蕗の葉にのせられた鹽燒のイワナを圍んでつゝき始めた、もうすつかり山らしい氣持になつた。今夜こそは久し振りでテントに夢を貪れるかと思ふと、又一しきり昂奮を禁ずることが出來なかつた。兼てオトブケには虫の多いことは聞いてゐた、全く日の光を認めることができなくなつた時分から出だしたヌカ蚊の猛襲は、テントの中をいぶした位では何の效果もなかつた。勿論マスクや手袋で皮膚の裸出せる部分はなくしてゐたが、少しの隙さへあれば入り來んで背中の方まで刺されるのには苦痛だつた。食事がすむや否やとても耐へら

れず熱いテントへもぐり込みその中をいぶしシュラーフザックの口を閉ぢてひたすら短い夏の夜の明けるのを待つた。

七月一九日　晴　後　雨

午前七時半、長澤氏は長い釣竿を片手に二人連れでやつてこられた。九時タウシペツを出發して右岸に沿ふて歩いた。その川の形は地圖とはずいぶん變つてしまつた。地圖に十分のり得る程度の中の島もできてゐた。全々外の澤が入つてゐるこしか思へないような中の島もあつた。根こぎにされた大木が河原にごろごろしてゐる。それらは如何に去年の大洪水が凄かつたことを物語るだらう。河原は廣く兩岸は開けて明い感じのする川だ。右岸こ河原こを縫ふて十時メトセツブの合流點に到る。この邊より右岸は山が川に迫つて來るが、魚釣の歩く道が僅に認められる程度についてゐる。長澤氏はこの邊のことに付ては實に明かである。常に先頭にたつて導いて下さつた。一一時半ポロカオトブケ合流點の對岸に到り晝食をとる。ポロカオトブケはオトブケ川の支流のうちでは最大なもので、殆んど本流の三分の一の水量あり、本流よりポロカオトブケを一里ばかり溯つた所に甚だ見事な瀧があるといふことである。ニペソツへ登るにもこのポロカオトブケを溯り右側の尾根を傳ふ時は一日で行けるといふことだ。

一二時三〇分再び歩き出した。このあたりより兩岸の山は川に迫つてきてゐるが、その森林美は到底他所（北海道）にては見ることは出來ないであらう。直徑三尺餘高さ二〇間位い雲つくばかりのトドやエゾが全々地面へ太陽の直射を許さない位にたちこめてゐる。長澤氏の話によるとこの邊は秋のキノコの生える時分は、一面といふ言葉が最も適當である位に密生するそうである。一里程の間は右岸の森林中を朽きつた無數にある巨大なる倒木の上を越えたり、或ひは下を這つたりして進んだ。併し第八の澤（ポロカオトブケより上流約一里弱の所にて、南クマネシリ西南方の尾根を水源とせる無名の澤であるが、第八とは營林區にて下から數へた番號である。之から上流も無名の澤ばかりなる故、假に營林區で用ふる澤の番號をそのまゝ澤の名の代にして使ふことにする。）から上流は兩岸に崖が表れて、その上をからむことは困難なる故長澤氏の言葉に從ひ水際を進むことにした。水量は可成りあつたが渡渉は決して困難でなかつた。それ故行けるだけ行つては渡渉し又行けるだけ行つては渡渉しながら行を進めて行くうちに立板に水を流すような觸感のいい水成岩の一枚岩の所を通つた。我々の足音に背中を見せながら逃げまどうイワナが方向を間違へたかどうしたものか殆んど水のない所まで泳

ぎつめて遂にそこに体を横倒へて、その白い所に赤の斑點のある腹を表した時に、自分は思はず考へざるを得なかつた。少くとも人間から生命をおびやかされることを知らない筈のかゝる深山の魚までが又我々の足音に逃げなければならないのか、生命に對する迫害は本能的に知り得るのではなからうか、自分には解らない、併し總ての生物が生きよう、生きようとすることに絶えざる努力を拂つてをり、且それが生物の眞のさけびではないかといふことが自分には感ずることができるような氣持がする。眞黑な岩、冷い水の流、それは死の象徴ではなからうか。生きんとする努力、死への誘惑、彼等の戰は虞らく永久に續くだらう。自分にも生きんとする叫があれば、彼魚にもある。そう思つた時自分はどうしても彼をそのまゝ見逃して行くことは出來なかつた。そして自分は再び深みへ放つてやつた。そうしたことのあつたのは誰も知らなかつた。皆は思ひ思ひに休んでゐた。虞らく皆も各々の頭に色々の事を畫いてゐたらう。自分は善をした氣持でひそかに頬笑んでゐた。

少し雨模樣になつたので五時半第一三の澤の少し手前の暗綠の木立の間に熊笹を苅つてテントを張つた。一三の澤は南クマネシリから出づる澤でニペソツの地圖にある最後の澤なのである。明日からの行程は愈々地圖なしも同樣かと思ふと一層の緊張を覺ゆ。

ヤマゴの福松はさも得意そうに大きな木を切り出した。トドも白樺も容赦なくオトブケ川の流へ水煙をたててぶつ倒される。それらは到底日本アルプスなどでは想像できないような大きな焚火にされるのである。間もなく暗い全く無風の林中を白い煙が縫ふようにして昇つて行つた。

賑かに焚火を圍んで食事のすんだ時には消えるような星影さへ認められ、明日の天氣を喜びながら、色々とハコの形などを考へて見た。濡れた服を乾したりなどしてゐる間に話はそれからそれへと移つてゐた。オヤジ（熊のこと）に對する經驗談は最も吾々を喜ばし且最も得る所が多かつた。八時過ぎテントへもぐり込んだ。ここは昨日の露營地より餘程ヌカ蚊は少なかつた、太い生木の薪は朝までも燃え續けるのであらう。テントにうつる赤い焔の影は益々はつきりするばかりである。

七月二〇日　晴

流から立ち昇る朝霧は又となく爽なものであつた。午前八時露營地を出發した一三の澤の上は岸といふよりも殆んど水の中を渡り歩いたといつた方が寧ろ適當だらう。ここでも水量は可成りあるが川幅が廣いために渉りいい。幾重にも曲り曲つた川を正直に傳つて行つた。川は決して明い感じのする川ではない、唯暗いといふ感じよりも寧ろ神祕的な凄味を帶びてゐる。一〇時半シンノスケクシュペツの合流點に到る。土地の人はこの合流點を二俣なれどなぜか三俣と稱しボロカオトブケの合流點を二俣と呼んでゐる。シンノスケクシュペツは三國岳にその源を發してをりオトブケ盆地の水の半分はこの川に注ぐ。三俣附近に多分測量の時に用ひたらうと思はれる山小屋があつた。長澤氏は山籠りの時この小屋を根據地とせられるのださうだ。

シンノスケクシュペツは右の方から密生しきつた森林より極めて靜に流れ出てゐる。熱帶地方の谷地に見るかの如き感じのする川だつた。之に反し本流の方はやや急流の形をなしてゐる。そして直ぐ取付の右岸は崖になつてをるがそこは何のことなくからむことがてきた。三俣より上ること約五百間の地點にて少し早いが晝食をすることにした。荷物を置くや否や釣好きの田口君はヤナギの枝の竿で先づ功を表はした。この邊のイワナやヤマベはアブかミミズが一匹あればもう餌の必要はない、魚が一匹釣れればその目玉は直に次の魚の餌となるのである。自分と佐々木君とで焚火を作り飯をかける時分には晝飯のさいには十分なだけの魚が釣られてきた。我々の食事がすんだ時釣りながら歩いてきたといつて長澤氏はビクに溢れるばかりイワナをつめこんでやつてこられた。約束により人夫の一人は歸ることになつた。お互に無事を祈つて二方へ分れた（午後一時）人夫が一人歸るために我々の受くべき追加は約一貫五百匁であつた、七貫は下るまいと思はるゝリュツクも我々の期待するハコは愈々之からだと思ふと大して苦痛には感ぜられなかつた。崖があればハコの入口かと思ひ、川が曲つて見えないと、その先がハコであれかしと願つた。併し依然として川床には何の變化もなかつた。三俣の下流より崖の數が少くなつた代りに倒木の行手を妨げる數か多くなつた位のものである。兩岸相變らず暗綠の密林である丈の高い針葉樹が隙間もなくつつ立つてゐる。あたかもそれは黑い岩で作られた廊下でなく、樹木で作られた廊下であるが如くに、薄暗い礫の川床には、我々の行を嘲るように淺い水がチャラチャラと流れてゐる。何といふ皮肉な景色だらう兼ての期待が裏切られて行く淋しさを感じながら、約二里を歩いて第一八の澤に着（四時三〇分）福松の聲に行つて見ると河原の砂地に生々しい（オヤジ）の足痕があつた。まだその踏みしめた痕の水すら澄んでゐないこのオトブケではそん

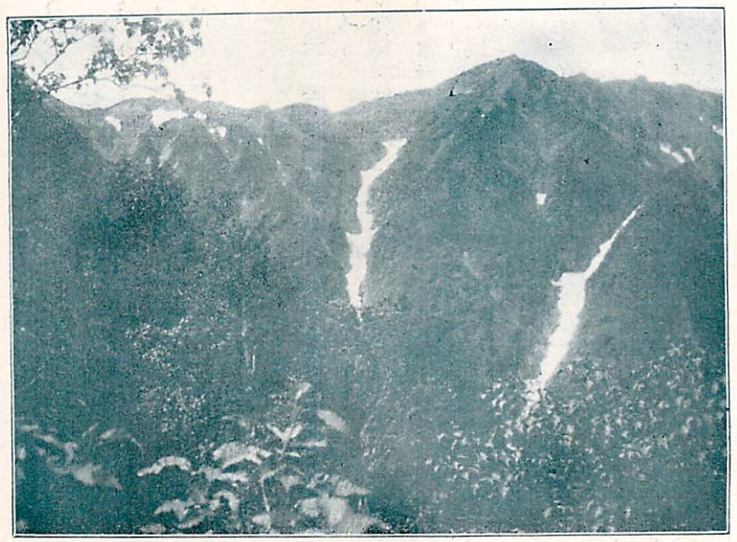
なものは少しも珍らしくないのである。ただその痕の大きいのに驚いた長澤氏は足痕の差し渡の十倍がその熊の大さであると直ぐ説明してくれた。

夜に對する準備もすつかりできた、食事はイワナの鹽燒ヤマベの酢の物蕗の味噌汁などに舌鼓を打つた。食後は焚火を大きくし、ウイスキーを混じた紅茶を廻しながら又一しきり長澤氏の懐舊談に耳を傾けた。長澤氏は嘗て憲兵中尉の榮職にあられ、シベリア、滿、蒙、臺灣等を踏破され殊に數年も生蕃と共に生活された得難い體驗の所有者であるが、今はあゝした山の中で隱遁生活に浮身をやつしてをられるのである。自分は何となく慕しかつた、そしてゆかしいその生活は或意味に於て自分を羨ましがらずにはおかなかつた。

七月二一日　快晴

佐々木君に呼ばれてテントの外へ飛び出たら、丁度川の眞正面の川によつて切り開かれたような樹木の間から數條の細長い雪溪（槍ヶ岳から見た笠ヶ岳のような）のある、殆んど直立に近い山が見えるのである。正に目的の石狩岳である。薄靄の木の間隱れに見える藍色の輪廓切れ切れに見える雪溪、それらの景色は我々を期待から裏切られた、淋しさから蘇らすには十分であつた。醒めた喜びについて襲ふてきた心配は、如何にしてそれを登り切るかといふことであつた。「行ける處まで行け」それは我々を勵ます最も力強い言葉であつた。オトブケ川を溯つてここまで來て始めてその姿に接した石狩岳は、北海道山岳地方の中心に位し高山に登らなければ、た易く勞少くしては何處からも之を望むことはできない。實に奥ゆかしい尊い山なのである。それだけに又その山を知りたい我々の希望も強かつた。

午前八時、一八の澤をたつた。行手は益々、右の岸から左の岸へ左の岸から右の岸へと造作なく、折重つてぶつ倒れてゐる、巨木のために遮られる。殆んど水と寧ろ尨大な朽切つた倒木の外に踏む所を知らない位である。大自然の嘯は自分には解されない我々から考へる時暴力としか思はれないようなこうした凄慘な景色も、大自然の一顰一笑のうちにあるのであらう。自分は山を自然を征服するなんて言葉にもいひたくない。智も慾もない生命をも大自然に托した、純な美しい自分を大自然にこそ育まれよう。之が山から受ける最も尊い心なのである。自分はただ敬虔な氣で水を渉り樹を越え默々として行を續けて行つた。一二時本流と二〇の澤、二一の澤の三俣に達した。（二〇の澤は後で石狩岳から見て解つたの



オトブケより見たる石狩岳

—藤江永次—

であるが小ニペソツの尾根のオトブケ側へのびた部分の左側を、水源の小ニペソツから出てゐる）ここからは石狩岳が極めて近く屏風の如く眞正面に聳えてゐる。その右には丸いユーニイシカリも見えた。本流はニペソツから發する故我々は石狩岳から出てゐるこ思はれるこの二一の澤を登ることにした。併し殘念なことには時の都合で長澤氏とはここで別れなければならなかつた。

午後一時半記念撮影の後我々一行四人は長澤氏と別れて二一の澤を登り出した。殆んど平地を流れるに等しい樣だつたオトブケ川もこの二一の澤にかかつてからは少しづつその傾斜の度を增して來た。暗い樹脂の匂の強い澤を半里ばかり進んだ。澤の形は急に變つてきた。岩石も古成層の露出である。愈々石狩岳の下であることを知つた。針葉樹もいつしか見えなくなり薄綠の葉をつけた灌木帶となつてゐた。岩は深く切れこんで小さい瀧の連續をなしてゐる。尙も進んだ。左の崖からは水は少いが高い瀧が二三本かかつてゐる。もう石狩山脈から出づる幾多の褶の一から出てゐる瀧であることも明瞭になつた。岩石の切れ込みが深くて眺望は全くきかない。然しそれがいくらかハコの形をなしてゐることがせめての慰みだつた。午後五時澤はいづれも高さ五六間ある瀧になつてゐる所に到つた。幸ひ附近に漸くテントを張り得る程度の平地が少しばかりこ白樺の木もあつたので露營することにした。

明日の岩登りや雪溪を登るテクニックをあれこれと想像する緊張した氣分は長く瀧の音を耳にこめて、なかなか我々を寢さしてくれなかつた。

七月二二日　快晴

午前四時三〇分テントを出た。濕氣を帶びた谷底はまだ薄暗かつた。綠の草には露が鈴なりについてゐる。こうした山中でも朝まだき頃の空氣は流石に美しいような氣持がした。肺の底まで洗ふように大きくいくつも吸ひ込んでは又吐き出した。見上ぐるばかり高い崖の頂には既に朝日がこごいてゐる。氣持のいい朝だつたが、又一種言ひ難い不安が漂ふてゐる。六時半出發の準備はできた。バロメーターによれば後八〇〇米突ばかり登ればいいのである。相談の結果とにかく左の瀧に續く澤を登りつめることにした。一時間半ばかり瀧を大迂廻にからんでその上へ出た。瀧の上からは傾斜は益々急になつた。それも暫して今度は雪溪へ來た。雪溪は細くその先の方は曲つて見えないが、確にその傾斜は劍岳の平藏谷の比で

はない。シュタイグアイゼンを付けピッケルで一歩一歩ステップを切つて愼重な態度で登り出した。荷物の重いことは極端に我々を緊張さした。午前一〇時雪溪は切れた。その上は足場のない程急傾斜の灌木帶であつた、そこを殆んど手づかみのようにしてあえぎながら無二無三に登りつめた時、始めてきく眺望にすつかり自分のをる位置を知り得た。そこは石狩岳の頂上から山脈に沿ふて少し左へよつた所より出る（グラートといふより寧ろ褶といつた方が適當であらう）急傾斜の褶の七分目所であることを知つた。

前面には石狩岳の頂が壓へ付けるように、聳えてゐる。眼下は眞黑な神祕的に見えるオトブケの大森林が擴つてゐる。近くにはニペソツのセンチメンタルな感じのする群を拔出た尖峯、日高、阿寒方面の連山が一望のうちに入るのである。思はず我を忘れて眺めてゐた我々は食事をして再び登り續けねばならない。之から行く所は兩面の切り立つた岩石の露出地であつた。併しまばらながらにも岩にからまるハイマツは何よりの助けになつた。岩をよぢハイマツをよぢ、幾度かザイルのお蔭を蒙つたかくして百米突ばかり登つた。尾根までは一〇〇米突ばかりであるが、前面はギャップをなし、その間は深く切り込まれて兩面の雪溪がそこで續いてをるのである。ギャップは一五米突程でザイルにすがつて下り得る程度のものであつた。併し向側の岩板は容易に登れそうにもなく、この疲れた體では足場を求めることすら困難であつた。時計はもう五時半を回つてゐた。仕方がないから今夜はハイマツに體を結び落ちることだけを防ぎ露の下りるまゝに一夜を明さうと覺悟してゐたら、突然下から這ひ上つてきた福松がいい露營地のあることを知らしてくれた。行つて見るとそこは比較的緩傾斜のお花畑で僅にテントを張り得る程度の「熊の遊び場」と思はれる窪みであつた。ガンカウラン、タカネスミレ、ミヤマキンバイ等がその美、その愛らしさを競ふように咲亂てゐる。この荒くれた男性的背景の眞只中に僅な地域に咲いた彼女等の美を誰が愛でくれるだらう。容赦なく吹き付けるオトブケの嵐にも屈せず、千年咲いたか萬年咲いたか、對照のなかつた彼女等の美はひるむことなく毎年毎年彼女等の春には繰返されてゐたのだ。今こそ自分がその對照となり汝の美しさ、汝の清らかさを讃美してやるのだ、こ若し彼女等にも解れば言つてやりたかつた。こうした場所にただ熊にその美、その生命までも蹂躪されながらも千年萬年も生きよう生きようこする絕えざる努力を續てゐる。之も又小さい生命の發露なのである。

思はずその虐げられた愛らしい景色には考へざるを得なかつた。氣をとり直し訴へる空腹を滿すためにザイルを下して

僅な雪を拾ひ上げてきた。飯を煮焚く程十分にはこり得ないので紅茶を作りコーンドビーフでフランスパンをかぢつた。
澄み切つた夜の空に數へるばかりの星、丁度輝き出した滿月近い月、眞黒なオトブケの大森林、男性的な背景にお花畑細長い雪渓、焚火、テント、紅茶、フランスパン、それらは全くハーモニーした、こんな偉大なる藝術はどこにあらう。自分はもう體の疲も忘れて無上に喜んだ。虞く皆もそうだつたらう。併しお互に明日を控える故ただ默々としてその大自然をながめるばかりであつた。
之は後に手紙によつて知つたことであるがこの夜露營地の焚火を見て長澤氏は安心して川を下ることができたといふことである。

七月二三日　晴　後　雨

午前七時自分の登山記錄の中で忘れることのできない最も懐しい露營地を去つて再びギャップの所まで登つてきた。切れ込みにある雪までは何のこともなく下りることが出來た。このクレバスのある急傾斜の雪渓を下つて迂廻する危險よりは寧ろ都合よく層狀になつた、この直立に近い岩石をよぢる方が安全に思へた。可成りの冒險が愼重な態度で行はれた。そして崖上のハイマツからザイルが下された時は、もう我々は危險區域を脱したのであつた。荷物や人がすつかり運び上げられるまでには三時間を要した。その後は比較的樂なハイマツや岩苔の間を一一時漸く尾根へたどりついた。
始めて石狩側を眺めた時石狩岳のオトブケ石狩の兩方面を知りえた時それが餘りの兩極端であることに驚いた。その石狩側が山勢こいひ、傾斜こいひ、澤の形こいひ實に美事に整頓されてゐるに反し、オトブケ側はそいだような急傾斜　不秩序な澤、荒くれた岩石の露出なのである。それは何といふ皮肉な兩面だらう。
石狩川から盛んに吹き上げる霧は完全な景色を與へてくれない、ただ時々トムラウシの南面にある雪田が美しく見えるだけだつた。之から下らうとする奥山盆地も見えたがオトブケには及びもつかない小規模のものである。
石狩側からは強く吹きつけてきてもオトブケ側へ一歩下りれば草の葉一つ搖がない、之が石狩岳の特徴なのである。山上は雨でもオトブケは天氣であることは珍らしくないそうだ。
少し早いがパンでこしらへた腹は既に空腹を訴へたので雪水で飯を煮いて食つた。二時ここを出て頂上へ向ふその頃か

ら雨混りの霧になつた。眺望は少しもきかないのが残念だ。併し時々頂上の黑い影がひさしのようにオトブケ側に物凄くつき出てゐるのが見えた。咲き亂れたココクサを避けながら、ゆるやかな氣持で進んだ。三時岩苔を踏み踏み頂上へ着いた。
最後に残した四本のエヤーシップを分けてのんだ。又格別の味だつた。その空罐に既に來た筈であるがまだきてゐないらしい慶應の大島君田中君等の一行のため約束の書遺を入れて、三時半山を下り、全く山の寵兒大自然の寵兒となり得た無意識の喜び、目的を達し得た有意識の喜を感じながら、前石狩澤の露營地に着いたのは午後六時であつた。
その後前石狩澤を本流まで下り本流に沿ふてユーニィシカリ大箱等を過ぎて層雲別に到り愛別に出てこの行を終つた。前石狩澤以後のことは色々の本や雜誌によつて既に紹介されてゐるから今ここでは省くことにする。
この紀行が「山とスキー」の欄ページを占むるのは餘に恥しい行程ではあるが謎のオトブケを單に紹介する意味に於て私が拙い筆をとつたのですからどうかそのお心算で。
最後に今度の行について色々御世話になつた河原繁氏、近藤直人氏、長澤元次氏、に對しこの記を通じて心から感謝いたします。

—一二、九、一五—

ステアリングとボディスウイングに關する私見

中野誠一

□

スキーイングの動作に就て此を物理學的に分解して、正確なエクスプラネーションを與へると云ふ事は甚だ困難な事である。夫は或一つの動作に於てでも、溫度、濕度、積雪量、何々、何々と無數のフワクターを有して夫れが一度づゝ其狀態を異にするからである。

然し、スウィングを惹き起すに最も重要な動作或は作用を擧げるとすれば先づ次の三個になるかと思はれる。

A　エッヂング　(Edging)

B　ボディスウイング　(Body swing)

C　ステアリング　(Steering)

此中、エッヂングに就ては本誌で先に多少說いた事がある、常に新雪で必ず雪の中にスキーが埋る樣な場所で練習して居る者にとつては、エッヂングは他の二者よりも重要な意義を有する樣に思はれる。然し、何時も、硬められたシーフエルトでばかり練習する人にはエッヂングは大した問題でない。否時にはエッヂングの爲に禍される事すらある。かゝる人々にとつて最も重大なフワクターは、ボディスウイングとステアリングである。然し此二者の中ではボディスウイングは自然の力を利用する事なしに forcing によつて廻轉させるのである。從つて、此に關係する重要な事は体の重心位置と其の遠心力に對し体を如何なる姿勢又は位置に於て行ふかであると思ふ。

ステアリングは此二者に反して一層複雜な力學的關係があるそして此問題を吾々が力學的に解說する事は不可能である事は論を要しないが、力學者を介しても到底吾人の滿足する樣な解說は與へて呉れまいと思ふ。

筆者は無論、之を力學的に解析する能力も意志も無いが

極く簡單な事柄で此問題に觸れて見たい。さうする事によつて、幾分かスウィングの要領を呑込まうとする人又は他に呑込ませやうとする人の參考になれば幸甚である。

□

スキーイングを成可く分解的に或は解析的に說明する事乃至は考究する事は單に自分に歸する好奇心の滿足の外に之によつて、かゝる事をしないよりは、より早くスキーイングを上達させる絕好の指導者である。漫然と滑る人より考へながら滑る人の方が早く上達する。例へ前者が天才的であつて、後者より上達が早くとも夫は單なる一工場の職工に過ぎない。後者は例へ技術に於て劣るとも技師である此樣な意味で、常に我々を啓發して呉れる人は、先第一に Vivian Caulfield を推さねばならない。彼の新著 Ski-ing-Turns (一九二二年一一月) は實に我等の良指導であると思ふ。今、其のアッペンディックスとして書いてある Rudder Action in Ski-Turning を讀むなら大体次の樣な說明がある

全ての Rudder steering による廻轉なるものは、操舵の企圖でもつて、安定な均衡を得る位置を發見する事である、と云ふ事が出來やう。若し進行する篙の力が自動的のものであつたならば、此企圖は徒勞である。例へばボートの舵を或る角度に固定したなら、其ボートは或る半經の圓の上を廻るばかりである。自動車の前輪を同樣に固定しても、矢張圓運動をやる。然し進行を與へる力が他動的即ち他から供給を受ける場合に於ては、例へばヨットの場合の風であるとか、スキーの進行を與へる爲の重力の樣な場合には、一方の面が他の面と角度を作る事——ヨットのキールと舵、或は兩スキーの相互の角——は只單に、無論進行方向の變化は起すが、其の最後に於ては安定な均衡の位置に達する處の、換言すれば或範圍又は或角度、又は或時間だけ方向變換をする處の舵作用を生ずるに過ぎない。ヨットと舵、二本のスキーは或限度以上には廻轉しない。そして其後は直線上を廻轉することなしに推進するか又は制動進行を行ふのみである。そしてその兩者の組織がどうあらうとも、即ち船で云へば舵が胴中にでゞも船首にでゞも又は後尾にでも、又スキーなら尖端と尖端、中程と尖端、後端と尖端とに其の位置があらうとも、此等の組織には關係なしに、進行方向と、平衡を得た時の位置的關係は、他の狀件が等しかつたならば、其二面の關係的位置、換言すれば二面のなす角度に左右されるのである。

□

脫線の懷はあるが私は右の說明の中で、其の引例に多少誤解がありはしないかと考へる。スキー其物に就てでは無いが、一寸私の考を述べたい。即ち、ヨットの Rudder

action は其の舵と水との關係ではなしに、帆と風との關係である。之は明な事實であつて如何な場合にもヨットの進行方向は單に帆と風との角度を變へて決定するのみで舵はタックリングの場合に用ふるが、進行方向の決定には舵を使用しないのが普通である。

□

次に又カウルフィールド氏は、同書中附圖を附してステアリングに就て大略次の說明を加へて居る。

兩スキーがV字形に保たれ、均衡を保ちながら、A圖一の樣に眞直にダウンヒルに制動されて居ると想像する。而て、Rスキーの位置から兩スキーの尖端と後端が相接する迄即ちRスキーを其長さだけ滑り出させると仮する（無論之は實際には行ひ得ないが）（A圖二）。新に生じた此横向きのV字形は安定を得て居らない。だから此爲に新しい廻轉が惹起してV字の頭が下方を向いてA圖三の如き位置に至つて、安定即ち均衡を得るのである。

次に、もとのV字形からRスキーを其の長さの半分だけ滑り出させてB圖二の如き位置に固定すると仮する。此形は再び其の安定を失つて均衡狀態に達する迄廻轉する。此場合はA圖の時と少しく異つて前者の約半分程廻轉してステアリングスキーが初の方向に約直角に到る迄繼續して後に均衡を得て、B圖三の樣な狀態になるものである之即ちテレマークの安定な位置である。何となれば此スキーの並べ方は無論テレマークの形であるからである。

更に又、C圖一なる均衡狀態から、今度はRスキーの全長の四分の一だけ滑り出させてC圖二の如き位置にする此場合はもとの型とB圖との中間のものであるから、其の均衡も、其の半分で得られる。即ちA圖の場合の約四分一の角度だけ廻轉して、C圖三の均衡狀態になるのである。

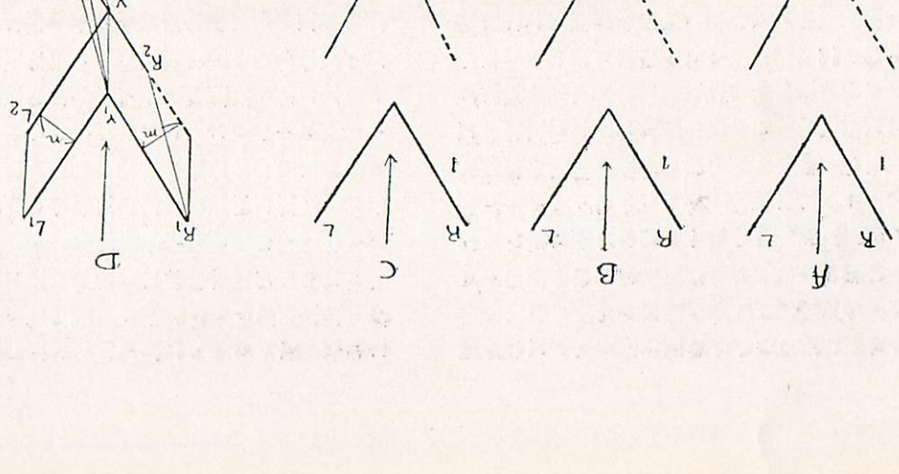
今迄はスキーの先端を合せてV字形となす事を想像して居たが若し後端を合せてV字形にして一方のスキーを其方向へ四分一だけ前出させたなら、之はオープンクリスチャニアの形である。

□

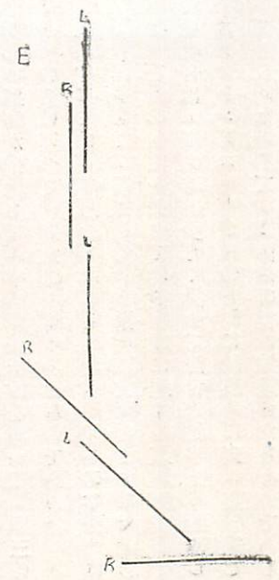
更に私は前述のB圖の場合に似た一例を考へ度い。左右のスキーが平行してRスキーは其長さの半分だけLスキーより前出して滑つて居ると仮する。此時Rスキーは其重心を中心としてE圖二の位置に廻轉したとする。此時はRスキーの受ける抵抗とLスキーの受ける抵抗とに差を生じて、廻轉をE圖三の方向に起すのである。

□

B圖はカウルフィールド氏の言の如く一種のテレマークポジションである。然し同じ樣であつてもE圖と比較する



L（左ヌキー）…
A（$=L_1L_2V_2V_1$）×重力×抵抗（$=n$）
R（右ヌキー）…
B（$=R_1R_2V_3V_1$）×重力×抵抗（$=m$）



時は可成面白い差がある。

今B圖と同じ場合を想像して此をD圖によつて考へて見ると、LスキーがL_1からL_2迄進行する間にRスキーはRからR_1迄進行する譯である。此場合兩者の抵抗の量を比較すると挿圖中の式となる。

之によつてカウルフィールド氏は重力を均等にする、即ち兩スキーに同量の体重を委ねる事を前提して居るが故、RとLとの重力は等しく、抵抗方向への進行距離、即ちmとnとは又等しいが故に、結局Aなる矩形となる矩形の面積の大小による事になる。無論、AB兩矩形の面積は等しいから、L式とR式とは等しく、即ち兩スキーの受ける抵抗は等量である、兩スキーの抵抗が等しければ決して舵作用は起り得られない。然し實際に於ては此場合確に廻轉を惹起する。之は抵抗以外の他の原因に支配されるが故である。

即ち、此場合に生ずる廻轉は理論的に考へればV_1からV_2に進む重力の他に、新しく脚を前に滑り出す爲に生ずる、R_1よりR_2への方向に進む力が與へられて、其合力であるV_1Kと云ふ新方向に其の進行が起ると見られる。其時なほ兩スキーの間の角度が等しく保持されて居る爲にLスキーの受ける抵抗はRスキーのよりも少くなつて、此處に初て、抵抗の大小が生じて、Rスキーのステアリング、アクションの目的を達するのである。

此を要するにV字形の滑降から、即ちskidding-positionからテレマークスウィングをすると云ふ事は、スキーを滑り出させて新しい進行方向を生ぜしめると云ふ事が其の一次的の原因であると思ふ。

然し圖に於ては、全く其類を異にしてsteering-actionの爲に一方を新にskid-offすると云ふ事、即ち、舵作用其ものが一次的原因である、

□

極めて範圍の狹い考へ方、即ち、單にステアリングの點のみから論じたならば、前記の樣に二種のステアリングがあると思ふ。

然し、全てのスウィングに於て、單にステアリングのみで其の目的を達する事は少いと云はねばならない。多くの

場合は前に記した三種のファクターの共同作用によつてスウィングするものである。今エッヂングの事を度外視して即ち、ステアリングとボディスウィングとの關係に就て、少しく考へて見る。

□

ボディスウィングの一番極端な例はジャークドクリスチアニアである。之は全然ステアリング等を用ひずに單にボディスウィングのみで行ふものである。クラリューナシュプルングももしスウィング中に入れればボディスウィングのみで行ふスウィングである。

ボディスウィングは体を捻ると云ふ事から、其の了つた時の体の位置は其進行線上に來る可きものである。だからスキーは單に横滑りだけで廻轉するものである。であるから、ボディスウィングを急に行ふ時は体の重心の安定を得る事が甚だ困難になつて來る。之に反してステアリングは理論上全く其ステアーする間は横滑りは無い譯である。從つて、廻轉に要する圓の半徑は甚だ大きなものになる。故に多くの場合はステアリングとボディスウィングとを使ひ分けて一ッのスウィングを完成さすのである。

多くの場合テレマルクの方がクリスチアニアよりも廻轉の半徑が大である。之は其の姿勢が、ボディスウィングするのに不適當であるからの結果である。然し若しテレマークに於て廻轉の初期に思ひ切つてボディスウィングすれば殆どクリスチアニアと同樣のトレースを雪の上に殘すものである。

クリスチアニアに於て肩を出せとか尻を谷向けよとか云ふのは皆ボディスウィングの爲である。若し全然ボディスウィングをせずにクリスチアニアを行ふなら、テレマークよりは遙に大きい半徑を要する事は明である。

故に、問題はボディスウィングの機會、例へば廻轉中の如何なる時、初期か中期か末期か、其の程度、例へば除々に永くか急に短くか、にあると思ふ。此は全ての場合によつて異つて居つて、到底一定した方法は無い。只練習によつて其の臨機的處置を鋭敏に推察する樣になる他は無いと思ふ。

然しながら、初心者のスウィング練習に於ては最初に先づエッヂングとステアリングに就てのみ其の要領を感得させる必要がある。ボディスウィングは最後に自得する迄は練習させない方が良い樣に思はれる。要するに体驗であつて習得では無い。

長途スキー旅行に就いて

オトマール・グルトネル
足羽正伸譯

ハラルドといふ諾威人は從來のスキー家の信條を破棄して次の樣な事をいつた。「スキー術の奥儀は身を殺して唯スキーの自由な運動に總てを委ねることにある」と。斯くいつたものゝ氏自らこの言に多少の疑を挾み從つて十分な確信を持つ事は出來なかつた。然し氏の判斷は決して誤つてゐない、確に正しいのである。何故かといふに氏はスキー滑走の主要な成因（ファクトーレン）を次の如く考へてゐる。即ち身体はスキー滑走の大なるコンポーネントであるがこれはスキーの運動に從屬的なものである。而してスキーは又雪の狀態如何より絶えず變化すべきものなるが故にスキーは雪に從屬的なものであると、故にスキー滑走の基礎は第一が雪、第二がスキー第三が身体であるといふ事になる。即ち身体がスキーに從屬的關係を有するものであると同樣にスキーは雪の狀態に順應するものである。

スキー家の頭腦を用ふべき點はスキーに對して其雪層が如何なる影響を及ぼすかを識別する事と堅實なる然も圓滑なる滑走をなし得る爲に或場合は滑走を促進し或場合は其を制止する身体の補助運動を巧みに連接挿入し行く事とである。然しながら熟達したスキー家の頭腦にはこの運動は如何なる形式をとつて行ふべきかはその熟練した優秀な筋肉の命ずるがまゝになされるやうに準備が出來てゐる。譬へていへば其身体補助運動は丁度樂器を演奏する音樂家の鍵盤の如く使用の瞬間を待つて居るのと同じである。長距離スキーを試る者の頭を用ふべき點はかくの如くにして

雪、スキー及び身体の從屬關係の會得及び評價の範圍を出ないのである。其最も主要なる處置に通曉する爲には雪、スキー及び身体の概念を敏速に了解することが必要である

先づ雪から考へて見たい、大氣の氣温が低いときには雪は粉末狀になつて輕い柔かな雪層をなして降る。その雪層は長時間寒氣が繼續すると粒狀になる。谷間の緣の雪、霧深い日が繼續した後の雪は大氣中の濕氣が雪に作用して針狀又は樹葉狀に凝結する。以上の三種の雪質はスキー家にとつて絶好の豫備條件である。

その上に乾燥した風の影響がある場合にはその粉雪は細粉狀の雪質となり尙强い風が吹く時には固つて板狀の外殼になる。氷雪の融ける樣な天候の時及び强い太陽の照光ある時は上述のあらゆる雪質は濕つた糊狀のものとなる。その雪は氣温の高い時の降雪後のものと同じで雪合戰をする子供等には喜ばれる事がスキーロイファーには全々不愉快なる思をさせるものである。

猛烈な寒さが來る時は糊狀の雪は薄い碎け易いざら〳〵した外殼を以て覆はれる。そのざらざらした外殼は太陽の照光の影響によつて軟かになり繼續的な夜の寒氣によつて再び堅いざらざらした外殼に堅まり光澤を生ずる樣になる弱い寒氣は雪を滑らかにし難く、粗い孔のあいたしかし尙堅い表面を殘す。そして何度も何度も融けて外殼を形成した後にゆるい寒さが續くとフヰルムの樣に薄い外殼を以て以前から積つて居た雪が覆はれる。その雪はさら〳〵音を立てながら片狀になつてスキーの下で飛散する。尙反覆して融解、外殼形成を行ふときは雪は漸次鹽狀となる。骨の樣に堅く氷つた朝の外殼雪は太陽の照光により表面だけ融かされる。この軟かになつた雪層は永く日に曝される時は更に深所迄糊の樣に柔らかなものとなり、劇しい冷却にあふと薄い凹凸のある氷狀堅滑なる雪面で蔽はれる。又番紅花（クロクス）（Krokus）メルツレースライン（Märzlöslein）が雪層を衝き破り夜も生温く穩かな春光の氣候になる、とその雪は融けるのである。暖氣が持續する折には、糊狀の雪は實際雪の厚さに從つて、早晩融解の運命を蒙るであらう。

種々なる雪質は糊狀雪を限界として二つの異つた群（グルツペ）に分けられる。第一の群は太陽や露によつて粘着性の糊や粥の樣な軟かなものになり重い塊となつてスキーに密着するものである。若しも雪が更に融けて再び凍結するならばその雪は粘着力を失ひ色々の變化をなしてざら〳〵に凍る雪の種類を經過して鹽狀の雪に近付いて來る。其表面だけ軟かくなつた外殼は顆粒雪（Korn）霜狀雪（Raureif）薄膜狀雪（Filmschnee）及び光滑な可破氷狀雪（Bruchglasur）と共にスキーをなす者に對する最良の豫備條件を提供するも

のである。第二の群（グルッペ）は寒氣が弱ければ弱い程益々雪はよくなるのである。穩かな寒氣の際にのみ形成せられる薄膜狀の雪に於ては總てのスキー滑走者に心魂を迷はすやうな快感を起させる粉狀雪に於てよりも、同樣な重量の際はより速かに滑るものである。

より惡質で又未熟者に對して不愉快なる雪は、厚い粉末（メール）狀雪、板狀雪（ブレット）、糊狀雪（パップ）、破狀堅雪（ブルヒハルスト）、堅雪（ハルスト）、骨狀堅雪（バインハルト）、粥狀軟雪（ブライヒヴァイヒ）等である。併し一年中一月でもスキー滑走をせずにられない樣なスキー狂は、唯不規則な板狀雪（ブレットシュネー）、粘質の糊狀雪（パップシュニー）及び初夏の午後の潰融せる鹽の樣な、粥狀雪（ブライヒヴァイヒ）をのみ呪ふものであつて他の雪の狀態を種々なる興味を以て善用する事を知つて居る。

次にスキーであるが我々が常用のテレマルク型は餘程以前からスキー滑走には優秀なるものとして證明せられて居る。テレマルク型の滑走は單純である。尖端の彎曲部（シーホン）が雪を下方に壓し壓力の法則と可塑性（シーホン）法則の影響とに依つて溝の先端の部分を以て堅い雪の線路（レール）を作るその雪の線路の上を溝（ミゾ）は不變の壓力に於ては眞直に滑るものであるスキーの稜（カンテ）の一つには强壓が移るならばその時には他の稜が輕く上がるので上げられた側の雪の抵抗は減ずる。それでスキーは强壓を受けた側へ稜が曲がつただけの半徑で圓を描き始める。此の壓力が高まるならばその結果表面の部分は上げられる。そうすると其スキーは舵となり雪面を壓迫して角附けをする。そしてそれは稜の壓力が大なれば大なる程益々狹く廻るのである。唯後端を餘り自由にし過ぎるならば斜面の勾配、或は滑降速度には無關係に起る處の体の重心の前方に偏る結果として尖端は雪の中に突き入ることとなる。

身体の最も重要なる性質は重心の移轉の可能性といふ事である。重心は上体の屈伸や胸部を後方或は前方に倚りかゝらせる事により、又膝を伸ばしたり引き付けたりする事によつて移動し、其の効果を甚だ大となし得るものである兩足は常に注意しながらスキーの上に保たねばならぬのであるが、よく熟練した人は其注意を弛めずに身体を柔軟にする能力を有して居る。熟達者は又蹲踞姿勢を取りながらスキーに十分働きを及ぼすことが出來、そして重心そのものを前後に十分移すことを極めて柔かになし得るのである而して又開脚の姿勢で滑走し或は馬術教官（Reitlehrer）が „Ansanger“（兩足でしつかり馬の腹をしめる事）と稱する處の膝をしめた儘の姿勢で運動を行ふことが出來るのである。それは一般に馬術とスキー術に於ける体の姿勢の間には甚だ密接な關係があるからである。

スキー家は其身体を自由自在に動かさねばならぬ。併しそれは輕妙なる競技をなす者の樣なやり方ではなく、それは体を縮めることで、詳言すればスキーが雪上を壓し始めるや否や腓の筋肉から漸次体の上方へ上つて行くべき筋肉の收縮即ち猫の樣に身体を縮める事である。

大体の要點だけを述べた上のスキー術の基礎原理について十分造詣の深いといふ事ともう一つ地方旅行家に對して密接な關係を有することは、所謂第六官を以て探索し、切迫、錯亂の狀態にあつても冷靜に事を處する森林に住む地方人や山に住む鑛夫達の超人的經驗とである。子供時代から頭の中にしみ込んで居る多くの些細な注意事項は地方旅行家によつても又必要なものとされるのであつて、例へば多くの徑を見出した際極く些細な事即ち樹梢の形によつて方向を印象したり、根の進み方によつて地形を想像する智識等の事は生きて來るのである。

長途スキー旅行を爲す者の頭を用ふべき點は色々の狀態將來の出來事、又それと關連して居る滑行及び確實性に對する影響等を電光の如く認識する事である。地形の各變化はスキーの處置を變じスキーの狀態の各變化は体の重心の狀態を變ずる。以下に示す二三の例はスキーをなす者の等しく認め知りそして考へる所であらう。

一、廣漠たる傾斜の緩い原野は雪煙の立つ樣な粉雪の時に自由に滑走することが出來る。スキー滑走者は細い一線上を遙か遠方迄見渡すことが出來るのである。而して表面の光澤の區別で彼處の雪は柔く彼處の雪は糊狀雪で彼處の雪は滑らぬ雪であるだらうといふ事を知り得る。前に出したスキーが尙進行をつつける樣に兩膝は十分强くまげそして腰部は柔かくしてスキーの後端に對し後方に推續ける樣にすれば良い。所が一旦糊狀雪の中にスキーの尖端が突入すると抵抗が增大し速力は減じて身体は其蹲踞の姿勢から投げられ、その時若し滑走者が注意しないならば忽ち眞倒に糊狀雪の中に投げ飛ばされるであらう。

二、森林の緣の邊は一段下方に深く河床狀に緣をとられてゐる。そして二米突位の廣さの輪の帶狀地がある。森林を尙深く進むならば河床は深く蝕入して滑走者が沿うて來る處の帶狀地は丁度青蟲の樣にうねつて來る。滑走者はその峯筋の輝いて居るといふ事を見て、林の疎なる事から太陽の照光を推量し直ちにざら〳〵と凝結した板狀の雪なる事を知るのである。既にスキーの後端が次第に分れて滑る樣になり半制動の姿勢に移つて行つて滑走者は速かなる滑走を制動し自重して滑り青蟲狀の地の上に滑り入りそして靜かに行手の遙か先を見廻はさねばならぬ。

三、雪の良い時には森林中迄滑つて行く事が出來る。そ

うすると自分の前に二つの斜に通路を遮つて居る波狀地を認むるであらう。二つとも平に弱く作られてあるがスキーの尖端を上げてそれを越えなければならぬ程高いのである滑走者は復輕い抵抗が滑行を制止させるといふ事其向ふ側は反射の現象が起るといふ事及び此經過は二度短い連續關聯に於て繰返へすといふ事を確かに知るであらう。かくの如くにして膝を弱く保つて進み後方に深く推付け、波狀雪に衝突したならば輕く其の上に身を投上げ。波狀雪から立去る瞬間に臀部を深く下し、即ちアンザウゲンし其の爲に第二の波形雪が全然彼を脅かさぬ樣にし、却つて確な上の運動を以て其を通り越すやうにすべきである。

四、森林の入口を通じて滑走者は展望し難い切り開かれたる採伐路を見る。そして突然やつと二つのスキー長さ位の一つの深く踏み剷らされた森林中の道路が自分の前に斜に横切つて居るのを知ることがある。この場合は全ての事が示される。即ち「三米突の先、滑らかな堅雪、良い速力一米突の幅のある溝、その下には未知の狀態に在る雪の壁と深い粉雪とがある」と云ふ事を、この時は速かに二つのスキーを合せ屈身し溝の上に音を立てつゝ突進し跳躍をなして其の上を越え高く膝を曲げて雪壁の上を下りそして長く突進して行つて深い粉雪の中に入るのである。その粉雪の所では打擊によりスキーと身体とは強く壓せられ、力强く体を伸ばすことにより普通の滑走姿勢にかへる事が出來るのである。

五、滑走者が樹木のない廣漠たる原野を滑つて來た時一段陷落して居る雪崖上に來てその下方に突然多くの樅樹の殘株や岩壁が現れて來ることがある。危險を知つた時にはスキーの後 稜(ヒンテルカンテン) の上に身を投げ掛ける樣にしながら、一つ狹いクリスチヤニアをやり、直ぐに內側のスキーを前出させて其シュヴングの殘りを、妨礙物を優美に廻航し得る樣に、テレマルクに利用する。それから後足スキーが隨滑して其の間に外方へ角附けをした前足スキーの壓力に適應させる。そうすると滑走者は妨礙物からは下方に遠く離れて而かも再び元の滑降方向に滑走することが出來るのである。

最も簡單な地形の影響が表はす此の五つの例は若しも突然懸崖に達した場合に於てもそれは訓練を積んだスキー旅行家にとつては何の危ぶむ必要もないといふことを示して居るのである。これだけのことを熟知すれば如何なる狀態に於てもとるべき方法を知つて居る事になる。そして滑走を促進し或は抑止する身体の補助運動についての彼の智識はスキーの狂動を抑制する爲に常に適用せしめねばならぬのである。

スキーをなす者の頭を用ふべき事項は經驗と熟練とによ

つて地形、雪及びスキーに付いての智識が增せば增す程益々容易く益々少くなる。併しながら其等の事項は又滑走者が自分の技術の反省によつて惱されることが少くなればなる程益々興味あるやうになるものである。自分の身体とスキーとがよく調和一致して居るといふ事、凡ての地形に適合する智識を体得したといふ事、及び自分には障礙の除去がわけもなくなし得るといふ事を自認し得る人は誰でも敢へて自己を幸福なりと評價する資格を持つて居るものである。何故かと云へばその人は其等の事によつてスキー仲間の一番「ビリ」となつて自分の同僚を怒らせたり氣をもませたりして迷惑をかける樣なこともなく、冬が吾々の愛する山に與ふる其豪奢壯麗なる美を十分に味ふ時間と閑暇とを見出すであろふ。尙一つ最後に云はんとする事がある。長途旅行の知識と頭の訓練に對するレールブーフは一つもない事である。たゞヴアンドラーはその經驗から完全な生きた美しき教課を得るであろふ。

雪の名稱に就て

仙波正雄

今まで我國に於て出版されたスキーに關する著書或は雜誌は皆で約十種程あります。此等を通覽して見ると雪の名稱については隨分區々です、此等の名稱に統一を着けて置く事は、小さな事のやうではあるが、決して不必要な事ではなからうと思ひます。左に新舊の名稱を表を以て表す。新稱は多く舊稱の內から最も適當だと考へるものを取つたから重復を避けて新稱だけにして置く。此等の名稱は元より氣象學上から見たものではなく、唯實際スキーを用ふる上から見て都合がよいやうに選び或は命名したものである。これは私一個の勝手な意見によつてしたものであるから、此等の名稱が絕体的によいものとは信じてゐない。唯諸君の御參考にまで述べるだけです。

（九二一、二、一五）

	新稱	舊稱
雪下3°—4°ニ降ルモノ	粉雪	灰狀雪、硬雪、堅雪
雪度前後ニ降ルモノ	軟雪	粘雪、綿雪
氷ノ如ク凍結シタルモノ	凍雪	硬雪、氷結雪、氷雪
破氷レ易キ結表皮ノ有スルモノ	表層凍雪	表層結氷雪
一度融ケテ再凍ツタ粒狀ノモノ	粒狀雪	ザラメ雪、春雪
滑ラル雪トガ滑ル斑狀ヌチナシテイルモノ	斑狀雪	
多クノ水分ノタメニヤヤツテチヤベナイルモノ	泥狀雪	濕雪

特約店募集

目錄進呈

秩父宮殿下

たゝ賜を榮の
台覽品御買上
獻上品御納嘉

美津濃式登山用品を是非御召用あれ

專門大商店
東洋最大

東京神田神保町
大阪
京都
神戸

美津濃

運動用品店

會告

◇本會々則を今回定めましたから左に發表致します

山とスキーの會々則

一、山とスキーの會はスキー及び山岳に關する月刊雜誌山とスキーを發行する爲に北海道帝國大學文武會スキー部關係者の組織する會である。

二、必要に應じ雜誌の發行以外にスキー及び山岳に關する各種の事業を行ふことあり。

三、會員は幹事會の推薦により會則を承認し出資金一口以上を引受けたるものに限る。

四、出資金額は一口金貳拾圓とする。會員は此の範圍内に於ては常任幹事の指定により何時にても拂込をなすべきものである。

五、會員退會するときは常任幹事に通告しなければならぬしかし既に拂込みし出資金は返還しない。會のため不都合あるときは幹事會の決議により除名することがある。除名の際は拂込出資金を返還するも在會中要した各種の費用を精算する。

六、會員中會務にたづさはるものを幹事とする。

七、幹事の互選により三名の常任幹事を定め常に會務に當ることゝす。

八、必要に應じ特定の事項に就て委員を置く。

九、毎月第一水曜日幹事會を開く。常任幹事の必要と認めたるときは臨時之を開くことあり。

一〇、協議事項の決定は出席幹事一致の意見による。但し幹事會は幹事總數二分一以上でなければ成立しない。

一一、總て役員は幹事會に於て定める。

一二、毎年一回六月會員の總會を開き會務の報告をする。幹事會に於て必要と認めたるときは臨時之を開く。

一三、會員は會務につき幹事に質疑し又は提案することが出來る。

一四、會則の變更其他重要なる事項は總會に於て出席會員三分二以上の贊否により決定する。